
COMPASS

海賊ルパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMPASS

【Nコード】

N1699E

【作者名】

海賊ルパン

【あらすじ】

時は西暦2614年、場所はフェイルのグローバルシティ。この王家で双子の男の子が生まれた。そしてそのうちの長男が悪魔族であつたことからこの王家の運命が大きく動いていく。本来なら王家に悪魔が生まれたという時点で、即殺害してしまわないといけないのだが、悪魔族は非常に戦闘能力に長けるので、このまま生かして戦闘人形に仕立て上げるという計画が立てられた。そして、無条件に生かすことは世間の批判を受けることになるので彼が生まれた瞬間に彼の意思に関係なく契約を勝手に結ばせた。その内容は彼の命

の保障をかわりに生涯王家に従い続けるというものである。

第一話「栄光の低迷」（前書き）

これは今から始まる壮絶な物語のほんの先っぽの部分にすぎません。
どうぞこれからをお楽しみに。

第一話「栄光の低迷」

「栄光の低迷」

「冗談じゃねえ！！なんで俺がそんなことしなきゃならないんだ！こんなへつぽこ騎士団なんかやめてやる！！」

グローナルシティの城の練兵場から廊下にも漏れ聞こえるような激しい罵声が響きその直後に一人の男がイラついた様子で扉を荒々しく閉め出て行った。

「いいのか、ゴールド？？アイツは現時点で最高の強さを誇ったウチの切り札だぞ？？ただでさえ最近ウチの騎士団の力が低迷してるのに、切り札まで失ったらここの栄光はいよいよ終わりだな・・・。」

顔にメカ系のものをつけた男が言葉とは裏腹な、落ち着いた口調でとなりの金長髪碧眼の長身の男に聞いた。

「ああ、いいよ。」

ロッドにゴールドと呼ばれたその男が大したことではない、といった口調でサラッとその問いに答えた。

「奴にはもともとこれ以上強くなる見込みがなかったしね。あれ以上強くなれない奴はいらないんだよ。解雇する手間が省けたよ。」

とゴールドはアラカサマにウザかった、という顔をしてみせ、その後すつきりさわやかな表情で余裕のありそうな言葉を吐いた。

「そうか。何かお前の中に対策があるってことだな？？それなら別にいいのだが・・・。」

ロッドは彼の前向きな返事を楽しみに待っているというように腕を組んで穏やかに聞いた。

「ナ・イ・ヨ そんな対策なんて。」

彼はロッドに底抜けに明るい笑みをむけながらちよつとした悪ふざ

け混じりの口調で答えた。

ロッドは呆れた、と言わんばかりの冷たい白眼視で彼を一瞥し、その場を離れた。

しかしロッドがゴールドの前を横切ろうとした時、ゴールドが「でも、」と独り言のようにつぶやいた。

ロッドもどうせロクなことは言わないだろうと感じつつも立ち止まり彼の声に耳をかした。

「今日はなんかいいこと起こりそうなんだよね〜っ！〜ずっと待ちわびてたことがー！！」

さっきとは似ても似つかない大声でゴールドは叫んだ。

やっぱりコイツはロクなことは言わない。

今日の前で切り札に逃げられたところじゃないか。

ロッドはもう彼の思考とテンションについていけないと感じその場を離れた。

第一話「栄光の低迷」（後書き）

今はまだきつと意味がわからないと思いますが、これから面白くな
っていくのでどうぞ、最後までお付き合いください。

第二話「小癪なガキ」

「小癪なガキ」

すると突然練兵場の扉が開いた。

切り札が帰ってきたのかと一瞬期待した一同だったが期待ハズレにも扉の向こうから現れたのはまだ年端も行かない少年だった。

その少年を馬鹿にするようにこの騎士団でも柄の悪いグループのものが彼に笑い混じりに話しかけた。

「おいおい、坊主。ママを探しにきたのか？そーじゃねえなら帰った帰った。ここはお前みたいな弱いガキが来るところじゃねーんだよ。泣かされたいなら別だがな」

少年を見下すような笑い声の後彼らは少年の周りを囲み、威圧的な態度で少年を追いつつ出そうとした。

すると少年が口を開いた。

「お前たちに用はない。俺は入団者審査員の者に会いに来た。そのものに会わないことには入団できないようなのでな。邪魔だ。道をあける。」

少年はとても子供らしくない落ち着き払った口調でゴールドへの面会を申し出た。

ゴールドはまさかの客のまさかのご指名に少々驚きながらも

「こんな治安の悪いとこにいきなり現れていきなりこの僕をご指名かあゝ。勇気ある少年だね（笑）しかも入団志望だっていうじゃないか。」

といいながらゴールドは珍しい勇児の顔をもっと近くで見たいと思い、彼に近づいた。

そして柄悪グループをかきわけ、彼の顔がはっきり見える位置で言

葉を続けた。

「ここに来たんだからこの入団許可年齢が18歳以上だってことくらいはいくら「ボオヤ」でも調べてきたんだよね。いっとくけど僕ら「オトナ」は「ボオヤ」の遊びに付き合ってられるほど、暇じゃないんだ、これが。」

ゴールドは皮肉混じりに小生意気なガキにこれでもかと言わんばかりに強い言葉で向かいあった。

いつものゴールドらしくなく、不気味なほど落ち着いている。彼が腹を立てているのは誰もがわかることだった。そして彼のいつていることは、ここの団員の誰しもが言いたいことだった。

だがこれだけ言われも少年は表情も変えずにやはり落ち着いた口調で「ああ、知ってる。だがその辺の18歳以上の人間よりはお役に立てるはずだ。あと、子供だから遊びととられがちだが、俺は本気でここに入る気できたのだ。あなたのその態度は俺に対するこの上ない侮辱だ。」

とゴールドに対する皮肉をこめていった。

ゴールドは最初このム力つくガキを追い出してやろうと思ったが、彼の熱い思いを秘めた瞳を見て

「そーいわれちゃあ仕方がないなあ。」

といい、彼の正面にたった。

確かに彼の顔はむしろここにいる命がけで戦っている騎士たちよりも強い意志を持ったいい顔をしている。

ゴールドはその顔をみて満足した、という表情をみせ、続けた。

「そこまで言うなら一回僕と勝負してみる??もちろん子供相手だからといって手加減はしないつもり。僕に勝ったら入団を許可してあげる。でも、負けたら即帰ってもらうからね。」

少年は微笑みをうかべ

「交渉成立だな。」

といって手を差し出した。

ゴールドもその手をしっかりと握って和解の意を表した。

するとその内容に納得がいかなかったロッドが不満そうに反論した。

「ゴールド、俺はお前の考えがわからない。ガキを入れたところでこの騎士団には何の特もない。それなのになぜ戦う必要がある??俺はもうお前の気まぐれにつき合わされたくないぞ。」

するとゴールドは

「まあそーいうなよ。もしかしたらこんなちっこいけど有力候補かもしれない。試すだけならタダだしね。」

と楽しそうに答えた。

ロッドはまだ納得いかない様子だったが、これ以上何をいっても彼は聞かないだろうと思い引き下がった。

第三話「バケモノ同士の決闘」

「バケモノ同士の決闘」

「じゃあ戦う準備しなきゃね。1時間後に下の階のスタジアムで待ってるね。ちょっと時間は短いけど、武器の調整くらいならできるだろうから。」

そういつてゴールドは準備室にこもった。

少年は調整くらいどこでも構わないというようにその場に座って剣の手入れを始めた。

両者のどちらにとってもこの1時間は非常に早く感じた。

あっという間に時が過ぎ、「その時」がきた。

ゴールド、少年ともに10分前にはもうスタジアムにきて武器の最終チェックをしていた。

少年は落ち着いた表情をしていたが、内心ゴールドの持っている武器をみてどぎまを抜かれていた。

斧だ。それもとても巨大である。目測だが、ゆうに400キロはありそうである。

普通ゴールドぐらいの体格では、通常の斧でも扱うのは非常に困難である。

それも、彼の扱う斧は40キロ級と重さも大きさも常識はずれである。

だがその斧をあえて扱うのだからよっぽどの实力があるのだろう。少年はそんなことに感心しながら自分の武器の手入れに力をいれた。だが、武器に驚いたのは彼だけではなかった。ゴールドも少年の使う武器をみて驚いた。

剣は剣でも彼の背丈よりも大きいロングソードである。しかも彼の扱う剣は両手片刃剣、刀のような形のアレである。両手片刃剣は扱

いが相当難しい。

無論普通は到底彼のような小さな少年が扱える代物ではない。

それを当たり前のように振っている彼をみてゴールドも感心していた。

「審判はロッドにやつてもらうから。君の剣が僕に触れた時点で君の勝ちだよ。君は戦えなくなるまで負けにはならないから安心してね。」

ゴールドはいつもどおりのテンションの高い声で試合の説明をした。少年は黙ってゴールドの説明にうなずいた。

「おい、早く始めるぞ。位置につけ。」

待ちくたびれたロッドがしびれを切らして二人をうながした。

「わかったよ。怖いな。ロッドは・・・」

ゴールドは愚痴をいいながら位置についた。しかし、位置についた途端、急にファイターの表情になった。

少年も位置につくと少年のあどけなさは消え、騎士の顔になった。

ロッドは二人の変わりように驚きながらも

「準備はいいか??」

と声をかけた。

「おっけ。」

とゴールドがハイテンションで答え、少年は黙ってうなずいた。

その返事を聞いてロッドが「レディ??」と声をあげると二人はにらみ合った。

「ゴー!!」の合図で二人は同時に地面を蹴り、飛び出した。

第四話「最強の彗星」

「最強の彗星」

剣と斧が重なり合い、激しい轟音が響いた。

少年は剣士特有のスピードを生かしてゴルドの周りをものすごいスピードで回り、彼の大きな動きの攻撃を外させ、そこに追撃をいれようと考えていた。

それもその筈、少年は斧使い「ノロイ」というイメージを持っていたからだ。

しかし、その考えは、一瞬にして変わった。

なんと、ゴルドはスピードアタッカーである少年とほぼ同じスピードで動いているではないか。

それどころか、斧を振るスピードまで、まるで空気を振っているかのように軽やかである。

少年はこれはマズイと感じてか、バックステップで一旦間合いを取り、遠めから銃で攻撃し、ゴルドの隙をつこうと考えた。やはりこれだけの強者を相手と対峙するとなると、フェアに戦ったところで負けは見えている。これくらいのズルは仕方ないだろう。

しかし、この作戦もまたもや破られることになった。

少年が間合いを取った瞬間、突然風の刃が彼の頬や手足をかすった。ゴルドはグラウンド・マジックという特殊な魔法が使える戦士でもあったのだ。

この魔法は詠唱やモーションがないので、かわすのがとても困難である。

これを使わせるくらいならまだ、接近戦のほうがわずかだが勝ち目がある。

少年は仕方がなく一か八かの賭けにでた。

ゴールドの懷に突っ込んでいつてすばやい突きを繰り出した。これは下手をすれば命にもかかわる決死の行為である。だが結局少年は入団者審査員の強さに圧倒される形で試合を終えることになった。ゴールドは彼の突きをも見切っていたのかすばやくその突きを払い、そのまま彼の持つていた剣を遠くに吹き飛ばすと、すばやく彼の喉元に斧の刃を突きつけた。

この時点でもう何をしても彼の斧に阻まれるだけである。

少年は彼が狙っていた最後の効果をしばらくまっていたが、それが起こらないことを確認すると静かに目を閉じ「降参」の意を表した。それを見たロッドがやつぱりな、といったそんな表情で掛け声をかけた。

「挑戦者、戦闘不能。勝者ゴールド。」

「なんだなんだ？？もう終わり？？なんか刺激が全然なかったんだけど……。やつぱ時間の無駄だったか。」

とゴールドがつまらなさそうにつぶやいたのを聞きロッドは、

「ま、まあ……、最近の挑戦者の中ではもったほうだよ。」

と挑戦者をかばった。実をいうとロッドはその少年の強さに心底驚かされていた。ゴールドという「バケモノ」に負けはしたものの、その洞察力や状況判断のはやさには一目おけるものがあつたからである。

このまま手放すのは非常に惜しい。

だがそのロッドの心とは裏腹に、少年は落ちた剣を拾ってゆっくりとしまうと悪夢のスタジアムを去ろうとしていた。

しかし、ゴールドが斧をしまおうとすると、「バキッ」という乾いた音が響いた。

それは頑丈この上ないゴールドの斧が根元から情けなく折れる音だった。

きちんと武器の調整はしたのだから、偶然に折れるということは、まずありえない。ということはあの少年によって折られたとしか、考えられないのである。

実はこれこそ試合中、少年が狙っていたことであつた。

ゴールドは思わず少年を呼び止めた。

「待つてよ坊や！！これをみてくれ！！僕の斧が、僕の頑丈な斧が根元から折れた……。もしあの時これで君を切りつけたとしてもこの状態じゃ意味がなかった。この勝負は君の勝ちだ。」

彼は振り返り、しばらくその言葉の意味がわからなくて呆然とその場に立ち尽くしていたが、ようやく「合格」の文字をかみ締めた。少年は念のため彼に念をおして聞いた。

「・・・ということは、俺がこの騎士団に入団することを許可してくれるんだな？？」

「うん モ・チ・ロ・ン、え」と名前は・・・。」

「榊騎士だ。これからは俺も一騎士としてこの国のために屈力しよう。」

騎士は名を名乗ったあと手を差し出した。

「ナイトかあゝ！！ゴツイ名前だな。でも、騎士にはピッタリの名前だね。じゃあこれからよろしくね、ナイト」

ゴールドは差し出された手をしっかりと握った。

世界最年少騎士の誕生だった。

第五話「大切な人」

「大切な人」

「ってか君さあ、なんでその歳で騎士になろうと思ったの??もしかしてスーパーマンにあこがれて??」

ゴールドは軽いジョークを混ぜながら、彼が来たときから気になっていたことを質問した。

するとナイトはさっきとはうってかわって微笑みながら優しい口調で答えた。

「守りたい者がいるからだ。俺が強くなれば、彼女を守ることができるからな。」

こんなちびっこからこんなクドイ言葉をきくことになるとは思わなかった。

ゴールドはなんてませたこというガキなんだと思いながらなぜかハイテンションで返答した。

「おー!!まだそんなチビなのに愛する女がいるのか!!やっぱイマドキのお子様は言うことが違うね!!」

しかしナイトはゴールドのいつていることがわからない、といったげな表情でため息混じりに反論した。

「違う。俺の知り合いの女性だというだけだ。それに俺よりだいぶ年上だしな。」

その返答を聞いてゴールドは

「なんだよ。そういうオチかよ。やっぱまだ早かったか・・・。」

と何を期待していたのかがっかりしながら言った。

「ただいま、ゴールド。ちゃんと仕事してる??あら、その子はいしかしてナイトじゃないの??」

そのとき再び練兵上の扉が開き、一人の美しい女性が澄んだ声でゴールドに話しかけてきた。

「ああ、マリアー！オカエリ そうだよ、今日、というか今、僕らの仲間になったんだ。ってか君コイツと知り合いだったの??それならそうと一言いつてくれればよかったのに。」

ゴールドは忠犬ハチコウのように満面の笑顔で彼女にかけよると、子供のように純真な目で彼女の言葉に応答した。

「えっ!?!この子を採用したの??ということはこの子はあなたに勝ったということなのね。。。いつの間にこんなに強くなったのかしら。。。」

ゴールドはちよつと嫌なことを指摘され、複雑な表情で答えた。

「えっ。。。あ。。。うん。。。まあね。でっでも、僕が弱くなつたわけじゃなくてコイツが。。。。」

ゴールドが言い訳しようとする彼女は笑顔で

「わかつてるわよ、ゴールド。あなたはとても強いもの。それは団長である私が一番わかってることだから「言い訳」なんていう自分の努力を台無しにするようなことしないで頂戴。」

と優しく叱った。

「あなたが。。。ここの団長??。」

「団長」という単語を聞いた瞬間、ナイトは困惑の表情を浮かべた。「ああ。。。黙っててごめんなさい、ナイト。まさかあなたがここに入団するなんて思ってた。。。ほら、女性が騎士、しかも団長してるなんてちよつと珍しいじゃない??別に特別な意味はないけどなんとなく言えなかったというか。。。。」

彼女はナイトの表情をみて必死に説明を加えた。

こんな説明じゃきつとコイツは納得しないだろうとゴールドは思ったが意外にもナイトは笑顔で

「そうか。なら俺はいつかあなたよりも強くなってあなたを守り抜ける存在になろう。」

と齒の浮くようなセリフをはいた。

第六話「彼らの関係」(前書き)

第六話「彼らの関係」

「彼らの関係」

ナイトの返事を聞いて安心したのか、マリアは

「まあ、頼もしいわね。じゃあ守ってもらっちゃおうかしら」と嬉しそうに答えた。

するとゴールドは面白くない、といった顔で

「えー、じゃあ僕はもうお払い箱???もう僕のことは頼ってくれないの・・・??」

と寂しそうに答えた。

マリアは子供をなだめるように優しく返答した。

「うふふ、ゴールド。そんなことないわよ。あなたは強いもの。これからバリバリ働いてもらうつもりよ。子供相手に駄々こねないの。それよりロッドは???彼に私がいなかった間の報告をしてもらわないといけないんだけど・・・。」

マリアは騎士団にいるものの、性格が非常に温厚なので騎士団の中でも男女問わず人気がある。

彼女が来た途端、彼女の癒しオーラを恩恵を受けようとたくさんの人々が集まってくる。

その間をぐぐり抜け、ロッドがやつとの思いで姿を現した。

「報告が・・・送・・・れて・・・申し・・・訳・・・ござい・・・ません・・・。今日・・・は・・・一人・・・団員が・・・加わ・・・りました・・・。」

毎度のことながら人の壁を抜けるというのは重労働である。ロッドは息も切れ切れに報告を済ませた。

「あらロッド・・・。ごめんなさい。こんなところまでこさせちゃ

って……。加わった団員というのはナイトのことね??わかったわ。ご苦労様。」

マリアはロッドの状態を見て、申し訳なさそうに返事を返した。さすがにこれ以上団長に謝らせるのは気が引ける。まだ疲れてはいるものの、もうそんな姿は見せまいとロッドはわざと元気そうな姿で言った。

「そうです。彼が新人です。団長にまでご心配をおかけして申し訳ありません。もう大丈夫です。」

ロッドはそこまで言い終わると、次はナイトの方に向き

「あ、そうだナイト、入団の手続きがあるから俺についてこい。」と彼を呼んだ。

ナイトは黙って彼のもとへ行った。

彼の行動を確認するとロッドはマリアに一礼し、ナイトとともにその場を後にした。

ナイトは早足で前を歩くロッドに追いつき、素朴な疑問を聞いてみた。

「なあ、ロッド。ゴールドはマリアとどういう関係なんだ??友達とはどこか違うようだが……??」

「ああ……??そのことか。お前はホント、ませガキだなー。さっきのお返しかな??」

ロッドはだるそうにいうと、続けた。

「ゴールドにとってマリア様の存在っていうのは確かにかけがえないものだ。だが、恋人同士ではない。マリア様はもう結婚してるしな。あいつからみれば……。まあ、恩人みたいなものかな。」

「恩人??」

ナイトはもっと深く追求したがロッドは

「そこから先はあいつのプライベートに関わるから俺が話せるようなことではない。聞きたければあいつに聞くんだな。」

といって立ち会ってくれなかった。

第七話「運命が動き出す」

「運命が動き出す」

今日は寒い。

どうやら外は雨が降っているようだ。

冷暖房完全完備の城内も、さすがに隅から隅まで暖めることはできないらしい。

もともと、彼らが寒いのはどうやら体だけのことでないようだ。

彼らの目の前を大きな棺がゆっくりと進んでいく。

騎士団の全員が今日は仕事を休んで、この式に出席した。

彼らはわざと棺を見ないようにうつむいたまま、黙って彼女を見送った。

その瞳に、うつすら涙を浮かべている者もいる。

それもそのはず。この葬儀は、彼らを昨日まで率いていた団長、マリアの葬儀だからだ。

誰もがこの人の死を受け入れることができなかったが、一番ショックを受けていたのが、命に代えても絶対守ると誓った人にたった6ヶ月で先立たれてしまったナイトだった。

その悲しみは、はかりしれないものがあった。

マリアと過ごした日々は、とても楽しい思い出ばかりだったが、それでも今、彼らの心を埋め尽くすのは悲しみだけだった。

葬儀が終わっても彼らの悲しみはおさまらなかった。

「なんで……、なんで……あの人がこんなことに……??」

一人の騎士が、かすかに聞こえるような声でつぶやいた。

その問いにゴールドが珍しく力ない声で答えた。

「わからないな……。でも、あんな完璧な人でも嫌われることがあるんだね……。僕は守りきる自信あったのにな……。それ

にしても、僕が団長になるのを見ててくれるっていったのに、僕が団長になる前に逝っちゃうなんて・・・薄情だよね!」

ゴールドはそこまで言い終わると、トイレに行くといって逃げるようにその場を去った。

ゴールドの様子をみたロッドが、ナイトの姿がないのに気がついた。あいつ・・・、どこいったんだろう??と気にはなったものの、今はそっとしておいてやろうと思い、その場にとどまった。

3日後・・・

葬儀の日とはうってかわって、快晴だ。

快い太陽の光に皆の心もほんの少し晴れた。

大人というのは皮肉なもので、悲しいことが起きてもそこにとどまり続けることができないのだ。

ゴールドやロッドをはじめとする騎士団の皆は意気揚々と練兵場に来た。

「やつほー 今日ガンバロー!」

ゴールドはいつものハイテンションで彼らに挨拶した。

「おう。ゴールド。お前は何かあっても元気だな」

ロッドはため息混じりに返事をした。

しかし、言動とは裏腹に、ゴールドの明るい態度に安心感を覚え、内心ホッとした。

そのとき、練兵場の扉が開く音とともに、ナイトが現れた。

「おお、ナイトか!! 3日も現れないからもう来ないのかと思ったぞ。」

ロッドはさっきの気持ちの尾を引いているせいか、明るくナイトに話しかけた。

しかし、ナイトからの返事はなかった。

結構大きな声で話しかけたのだが・・・、聞こえなかったのだろうか・・・??

疑問に思いながらもロッドはもう一度彼の方をたたいて話しかけて

みた。

「おい！！聞ってるのか？？」

「・・・・俺にさわるな・・・・。」

どういうことだろうか。確かに以前もどこか大人びていたところはあったが、ここまで冷たい口調ではなかった。やはりマリアが亡くなったことがよっぽどショックで話せないほどなのか。しかしそれにしては表情がいつもと変わらない。

ナイトはたった3日のうちに心がロボット化していた。

第八話「提案」

「提案」

しかし、マリアは死の直前に、ナイトに剣を残していた。

それは騎士の中の騎士しか使うことが許されない「ソード・オブ・キング」という特殊、かつ呪われた剣だった。

この剣は装備者に絶大な力をあたえるかわりに、世界一強いとされる騎士以外のものが使うとその魂を吸い取られるという恐ろしい剣だ。

しかし、マリアはナイトの急激な成長ぶりをみてこれはもう、自分が持つべきものではないと判断したらしい。

だからあえてそれをナイトに託したのだ。

しかし、彼女の死から3ヶ月たった今でも彼はそれを使おうとしない。

恐れからなのか、それともその強さゆえなのか……。そう考えさせられるほど、彼は強くなりすぎていた。

それを言付けるように、練兵場でまた一人、彼の手によってその尊い命を奪われた。

それを見かねて、ロッドがつぶやいた。

「マリア様がなくなつて以来、あいつは感情つてやつを忘れちまつたみたいだな。仲間まで殺すなんて……。次は俺たちかもな、なあ、ゴールド??」ロッドは隣でサッカーをしながら棒つきキャンディをなめているゴールドに返事を求めた。

「ほうふあふえゝ、ほうふいふあふいふあふあふえゝ。」……

何を言っているかわからない

「……早く飲み込め。」

ロッドは呆れて顔で遊びをやめないゴールドをみた。

ゴールドはキャンディを噛みながら続けた。

「これで17人目、見方が殺されるの。そろそろ手を打たなきゃバイね〜……。でも僕あんなバケモノと話したくないな〜。だって……。」「そこまでいうとゴールドは首を切られるジェスチャーをし、続けた。

「こうされそうじゃん！マジビビっちゃうよね〜！！」

「そうはいっても一応お前は団長なんだから。あいつだってお前のいうことなら聞くはずだ。ちょうど次の任務がひかえてるんだろ？」

ロッドはグズグズしているゴールドをせかすように念を押した。

「わかったよ〜。せっかちなんだから〜。」

ゴールドはだるそうに返事をする、剣についている血をふいているナイトにさりげなく近づいた。

「ねえ、ナイト。次の任務はジスニアの視察だね。だから〜、僕から提案なんだけど、……。武器を持っていかないっていうのはどうかな〜??」

前のナイトなら絶対に反論しそうな内容だ。

しかし、彼は表情ひとつ変えずに承諾した。

第九話「郷帰り」(前書き)

第九話「郷帰り」

「郷帰り」

「にしても相つ変わらずつまんない街だな。カジノひとつないなんて……。あるのは研究所ばかりじゃん!!」

ゴールドは何を言っても返事ひとつ返さない相棒とこの何の面白みもない研究者の街ジスニアの様子をみて思わず愚痴をこぼした。

さつきから何度あいさつをしても、なんと話しかけてもナイトは返事ひとつしない。

これでは、ただでさえつまらない視察が余計つまらなくなる。

ゴールドはイライラする心を落ち着けるためか、煙草に火をつけた。

「いいかい??ナイト。僕はここに残る。君が街の視察をしてくるんだ。何かあったらここに帰ってきてね。でもね、何があっても人を殺しちゃだめだよ!!君への今回の任務はあくまでこの街の視察。まあレディを助けるとかなら仕方ないけど、身寄りがない人とか見つけたらここにつれてきてね。じゃ、いつてらっしゃい」

ゴールドはハイテンションのくわえ煙草でナイトを見送った。

しかし、内心ではナイトが街中で人を殺し、騒ぎにならないかとても不安だった。

だが、ゴールドの心配をよそにナイトはきちんと言われた通り人を殺さず、困っている人を助けながら順調に街の視察をしていた。

街の様子を見ながら今度はガムを取り出してゴールドは、このままの状態でナイト帰ってきますようにと願いながらのどかな街の午後を見ていた。

しかしそのとき、ゴールドの恐れていた事態が起きようとしていた。「おいおい、お譲ちゃん、パパはどこにいったかって聞いてんのが分かんねーのか!!」

「いい加減にしねーと今度はお前をしばくぞコラー!!」

なにやら穏やかではない声を聞いたナイトが声のするほうを見た。そこにはマフィアと思われる強面の男たちがちよつと自分と同年くらいの女の子に怒鳴っている様子が見えた。

「ターゲット、発見。」

ナイトはそういつと彼らの元へと近づき、彼女を殴ろうとしていた男の手をつかんだ。

「なんだ??このガキ!!俺らとケンカしよーってのか??上等だ

!!この嬢ちゃんもろどもブツ殺してやるぜ!!」

そいつとその男がナイトに殴りかかってきた。

第十、十一話「無言の少女」「仲間」(前書き)

第十、十一話「無言の少女」「仲間」

「無言の少女」

「攻撃確認。防衛機能発動。」

ナイトはそうつぶやくと、今度はその男の攻撃を受け流し、みぞおちに拳を一発入れた。

男は思わぬその身のこなしと力の強さの前になすすべなく絶命した。

「こ・・・このガキっ!!」

他の仲間たちも攻撃してきたが、ナイトはすべて攻撃をかわし、自分より2倍は背丈がありそうな男たちをすべて一発の攻撃で殴り殺した。

そして彼女のほうに向き直りナイトには珍しく

「怪我はないか??」

と話しかけた。

彼女は首を縦に振ったが、その目はナイトにおびえているようだった。

その様子をみてナイトは

「俺は任務で彼らを抹殺しただけだ。お前には危害を加えない。安心しろ。」

と、自分に敵意がないことを伝えた。

彼女は言葉の意味がよくわからない様子だったが、とりあえず敵意がないことだけはわかったらしい。

「親はどうした??まさか一人ではないだろうな??」

ナイトの質問に彼女は困っている様だった。

その様子を見て彼の思想はある場所に行きついた。

「お前、声が出ないのか??」

すると彼女はゆっくりうなずいた。

「仲間」

いささか待ちくたびれていたゴールドの前にナイトがようやく帰ってきた。

ゴールドの足元には大量の煙草の吸殻や棒つきキャンディーの棒が落ちていた。

「おかえり」 遅かったね。ん??隣のプリティーな女の子は誰??」

「名前はわからない。どうやら声が出ないらしい。マフィアらしき男たちに囲まれていたところから推測すると、親は何らかの理由で蒸発した可能性が高い。」

「蒸発ねえ……。なんだか穏やかじゃないじゃない??身寄りがないなら親が見つかる城に置くしかないけど……。」

ゴールドはあの事件以外まったく口をきこうとしなかった彼がこんなによく話すことがとても疑問だった。

「それにしても今日は珍しくよくしゃべるね。」

だからなのか、彼の中にもしやという発想まで生まれてしまった。

「もしかして、僕のこと……。やだ!!そんなの困るよ!!僕は女性専門なんだから!!」

しかし、ナイトは彼の意味のわからない言葉を無視し、話を続けた。

「それが妥当だな。このまま家に帰したところでまた彼らの仲間に襲われるだけだからな。お前もそれでいいか??」

ナイトが少女に同意を求めた。

彼女は次々に出てくる怪しい連中に戸惑いながらも、彼の意見に首を縦に振って同意した。

「そうと決まれば城に帰還することだな。航空機を出せ。」

「なんで僕のほうが偉いのに君は命令形なの??」

ゴールドは不服そうに言ったが、ナイトは彼を無視して彼女とともに航空機に乗り込むとエンジンをかけた。

「無視かよ。ってか、おいおいおいおい!!置いてかないでよ!!」

ゴールドはそう叫ぶとあわてて航空機に乗り込んだ。

第十二話「二人のこれから」

「二人のこれから」

「……………ゴールド。……これはどういふことが説明してくれるか?? やつと帰ってきたと思ったら見知らぬ少女を誘拐してくるなんて……………」

少女を見るなりロッドはゴールドに聞いた。

コイツが女好きなのは前から知っていたことだがまさか犯罪まで犯すほどだとは思わなかった。

するとゴールドはすぐさま反論した。

「ち、違つよ!! この子は僕が誘拐したんじゃないでナイトが誘拐したんだよ!!」

あくまで誘拐したことは否定しないのか。

「なんだって!? ナイトが!? そうか、ナイトはこういう女の子が好みなんだな。」

ロッドはそういつてうなづくと続けた。

「…………で、なんで誘拐してきた??」

「なんか、コイツが言つには、」

と、ゴールドはナイトを指差し、

「マフィアかなんかに襲われてたんだつて。喋れないらしいし。あ、おまけに身寄りまでないと来た。」

「そうか。それならしょうがないな。」

「そゆことゝ そうじゃなきゃ僕が誘拐なんてしてくるはずないじゃない!!」

ゴールドがそう自信満々にしゅちょうすると、ロッドはどつだかな、というように首をかしげた。

その後ロッドはナイトに聞いた。

「それでその子の住む部屋だが、今空き部屋がない状態なんだよな・
・。そこで、だ。ナイト、お前の部屋においてやるってのはどう
だ??? お前が連れてきたわけだし、文句ないだろ??? 彼女も、どう
だ???」

少女は元気よくうなづいた。

「・・・御意。」

ナイトも冷たいが、はっきりと返事を返した。

「えゝ、そんなこと言っちゃって、ナイト君。もしかして犯しちゃ
おうとか考えてるんじゃない?」

「そうと決まればさっそく部屋に行くか。ナイト、案内してやれ。」

ロッドはゴールドに最後まで言葉を言わずに続けた。

「・・・承知。」

「・・・無視しないでよ。」

「ゴールド、黙れ。」

「うい。」

ロッドはあまりにも黙らないゴールドを黙らせ、少女のほうに向き
直った。

「じゃあ後はナイトについてけばいいから。」

少女は静かにうなづいた。

第十三話「氷の心」

「氷の心」

ナイトは少女を自分の部屋に案内した。

風呂などの使い方を一通り説明すると、彼は考えた。

事情を聞くにも、話せないとなるととても難しい作業になる。

せめて彼女の名と親の名くらいは聞ければいいのだが。

そこで彼はだめもとで彼女にあることを聞いてみた。

「お前、文字は書けるのか??」

しかし、彼女は首を横にふった。

やはり駄目か。ならばと彼はもう少しランクを落として聞いてみた。

「では、親か自分の名前は書けるか??」

すると彼女は机の上のペンと紙を手にとると文字を書き出した。

文字、というよりはほとんど絵に近い感じだがそこにははっきりと

「れいな」の文字が書かれていた。

「それはお前の名か?? お前はれいなと言うのか??」

すると彼女は静かに首を縦にふった。

だんだん希望がみえてきた。

彼はそれならばと親の名がかけるか聞いたが、それは無理なのか彼女は躊躇して書かなかった。

「そうか、ならばもう良い。今日は疲れただろう。ゆっくり休め。」

ナイトはれいなに彼らしくない優しい言葉をかけると、武器の手入れを始めた。

彼女はうなずいたが、剣や銃などの普通では見られない代物たちに興味津々の様子だ。

彼のそばを離れようとしなない。

それに気づいたナイトは

「なんだ、お前。これが気になるのか?? それなら一度武器の手入

れをしてみるか??」

と聞いた。

するとれいなは満面の笑顔で嬉しそうに大きくうなずいた。

感情を失いかけていたナイトだったがさすがにこの笑顔には心を動かされた。

人の感情を動かす為には、偽りの感情は必要ない。

本当の心からの感情を表し、全力でそれを表現することで初めて人の心を動かすことができるのである。

ナイトは彼女につられてか、微笑み混じりに

「そうか。なら俺が指示するからやってみろ。」

といって銃を手渡した。

重たいからなのか、慎重にしているからなのか、彼女は銃を両手で受け取ると、彼の指示に従い手入れを始めた。

いつもなら、面白くもなんともない手入れだが、今日の手入れは何か特別なものがあるらしい。

彼女は話すことはできなかったが、その一日、彼らの笑顔は絶えなかった。

第十四話「知り合い」

「知り合い」

確かにれいなと過ごす日々はナイトにとって少なくない安らぎを与えているのは確かだった。

しかし、そうやって楽しく過ごしているだけでは、ゴールドやロッドから言われた「彼女のことを聞き出す」という任務をこなしているとはいえない。

ナイトは考えた。

話すことのできない彼女からどうやって「彼女の事情」を聞き出そうか。

考えた末思いついたのが「テレパシー」の応用だった。

テレパシーを使えば、彼女が話せなくても、彼女に触れるだけで彼女の考えていることがわかるのである。

さっそくナイトはゴールドの元を訪ねた。

「任務のことだが、テレパシーを使おうと思っている。お前の知り合いで、テレパシーに詳しい奴はいないか？」

ゴールドは、せっかくの一服の時間を邪魔されて不機嫌そうに答えた。

「んんっ？？ああ・・・、それならリオ・ランゴットってやつを訪ねるといいよ。あいつ変人だけどテレパシーについては詳しいから、それにしても君は彼女のことになるとホント真剣そのものだね」

「そうか。わかった。そいつはどこにいるんだ？」

「ジスニアだよ。れいなちゃんとあったあの街。」

そういつてゴールドはペンのキャップを口でとると、紙に地図を書き出した。

さすが、グラウンド・マジックの達人というだけはある。

ゴールドはリオの家の周辺の地図をあつという間にすらすらと書き、それをナイトに渡した。

「はい、これ。この通りに行けばつくよ。」

「わかった。ありがとう。」

するとゴールドは目を見開いて

「あ、ありがとう！？君の口からそんな言葉が聞けるとは思わなかったな。やつぱ、男ってのは女がいると変わるもんだよね。」
とニヤニヤしながら言った。

しかし、ナイトはそれを無視し、一礼して練兵場を出て行った。

第十五話「掴めない男」

「掴めない男」

「ここか。」

街から少しわき道にそれた、目だたなさすぎる場所にその家はあった。

ナイトはノックしたら壊れてしまいそうなボロいドアを慎重にノックした。

「・・・。」

返事がない。留守なのだろうか。

ナイトはもう一度ドアをノックした。

すると突然ドアがゆっくり開いて中から中性的な顔立ちの男が出てきた。

「ノックはしないでいただけますか?? ドアが壊れるので。」

やはり壊れるのか。

「そこにベルがあるじゃないですか。」

といって男はドアの隣にくっついているカメモシを指差した。

あれがベルなのか・・・。

「申し訳ない。ところで、あなたがM r・リオ・ランゴットか??」

そうでなければ話す意味がない。

すると男は優しく微笑みながら、答えた。

「ええ。そうですね。この家は私一人しか住んでいないので。」

今一緒に住んでくださる方を募集中です。」

そういつてリオはナイトに何かを訴えかけるような目で見た。

ナイトは嫌な予感がしたのではっきりと首を横に振った。

「そうですね。残念です。それで、今日はどんなご用で??」

「あなたはテレパシーという技術について詳しいと聞いた。俺は今、

任務でどうしてもその技術が必要なのだ。俺にテレパシーを教えてください。

「それはいいですけど・・・。」

そういうとリオは黙って考え込んでしまった。

「何か問題があるのか??」

「はい」。大変失礼だとは思いますが、この技術は子供が理解して扱えるほど、優しい技術ではありません。あなたに理解できるかどうか・・・。」

「そのことなら心配には及ばない。俺はグラウンド・マジックが使える。足りない分は努力が補ってくれるであろう。」

リオは彼がグラウンド・マジックが使えることを心底驚いているようだったが、何か複雑な表情をしている。

「あなたのような子供がグラウンド・マジックですか?? 普通では無理ですね。普通なら私も信じることはできません。でもあなたは剣に「グローナルの騎士団」の刻印が押してありますね。」

暗黒騎士団の騎士ならば確かにグラウンド・マジックが使えてもおかしくありません。あなたを信じましょう。教えてあげますよ。」

「ご協力、感謝する。」

「いいえ、いいですよ。こんなところで立ち話もアレですから、さあさ、どうぞ中へおあがりくださ。悪魔族のちびっこさん。」

「知っていたのか。」

「はい、噂では聞いていました。そうでなければグラウンド・マジックなんていう大技は使えませんから。でも安心して下さい。私は世間の方たちのようにあなたを差別したりしません。気にせずどうぞ。」

「ならば、お言葉に甘えてお邪魔させていただきました。」
そういつてナイトは、土壁のボ口宿に入ってしまった。

第十六話「お泊り」

「お泊り」

外見のボロさとは似ても似つかないくらい、家の中はきれいに改装されていた。

中には試験管などの実験道具が棚にきれいに整頓されて並べられている。

研究室の奥のほうの小さな扉をくぐると、「タタミ」と呼ばれるものが床にびっしり敷き詰めてあり、頭上にはなぜか、とてつもなくリアルなカメモシの形をしている電気がある部屋についた。

リオはナイトに「ちゃぶ台」の周辺に座るようにすすめると、お茶を入れてくるといって研究室のほうに消えていった。

「質素」というのはこういうことをいうのだろう。

ちゃぶ台以外はほとんど何もない部屋である。

ナイトはその異様な部屋でそんなことを思った。

しばらくしてリオが何やら変な煙の出ている液体をもって戻ってきた。

「さあ、どうぞ。お茶です。」

「ありがとう。なるほど、お茶というのは青緑色をしているのだな。」

「そうです。緑茶です。」

「緑茶か。発酵していないお茶は初めてだ。さっそくいただこう。」

ナイトはその異様な液体を一口飲んで、話を始めようとしたが、あまりの味に言葉が出なかった。

それを察してか否かりオが話を始めた。

「さて、では早速この資料をご覧下さい。これはテレパシーを使う上で必要になる氣功の集め方を書いた資料です。手の平に氣を

集中させ、被験者に触れることで初めて被験者の心を読み取ることができるとす。」

「氣功か。それで、どうすれば氣功が使えるようになるんだ?。」

「氣功には、陰と陽の2種類の氣が存在します。陽の氣を集めるためにはこの資料に書いてある体操を太陽の下で行う必要があります。そして陰の氣は深夜に一人で墓場でこの体操を行う必要があります。」

「墓場??何かの間違いではないのか?。」

「本当ですよ。でも嫌なら私は別にいいのですが……。」

「いや、やろう。」

「そうと決まれば早速やりましょう。あ、それと氣を集めるのは非常に時間がかかります。なのでしばらくあなたはここにお泊りする必要があるんですね。もしよければここに住んでしまってもいいですよ。」

どさくさにまぎれてリオはまたナイトをここに住むように勧誘している。

しかし、ナイトはそれを見破って返事をした。

「そうか。わかった。住みはしないが泊まりはしよう。しばらくお世話になる。」

「そうですか。残念です。わかりました。」

こうしてナイトの住み込みのトレーニングが始まった。

第十七話「想いのテレパシー」

「想いのテレパシー」

20日の住み込み修行を終えてナイトがグローナル城に戻ってきた。誰かのために何かをしようとするということのは必ずしも人を成長させてくれるものである。

20日間の修行を終えて帰ってきたナイトの顔はより一層引き締まり、男の顔になっているように思えた。

ゴールドの部屋のドアをノックするとれいなが出迎えてくれた。れいなのはナイトの顔を見るなり目を輝かせ抱きついた。

「ただいま。聞いてくれ。俺はテレパシーが使えるようになった。だからお前はもう無理をして話せるようにならなくてもいい。」

それを聞くと彼女は満面の笑みでナイトに感謝の意を伝えた。

ナイトもそれに答えるように微笑み返した。

「へえー！！君、テレパシーなんて大技使えるようになったんだー！！すごいじゃーん！！愛する女のために頑張ったんだねー。じゃあ僕の心を読ん・・・。」

「では早速俺の部屋に戻って試してみよう。いくぞ。」

ナイトはゴールドを無視してれいなをつれて部屋を出て行った。

「なんか最近シカト多くないっすか？？」

ゴールドは一人でむなしくつぶやくとロッドの邪魔をするために電話をかけた。

ナイトの部屋につくと早速二人はテレパシーを始めた。

彼は目を閉じて氣を手のひらに集中させることに集中した。

彼女はそんな彼の様子をじっと見つめていた。

「では、始めるぞ。」

彼女は小さくうなずいた。

彼は彼女の手を静かにとると、意識を集中させた。

すると蚊の泣くようなかなすかな声がナイトの頭の中に響いた。

これがれいな声なのか、とナイトは感動を覚えた。

よく耳を澄ませてみると確かに言葉が聞こえる。

「これ、ちゃんとナイトに聞こえてるのかな?？」

その声にナイトは優しく答えた。

「ああ、ちゃんと聞こえてる。美しい声だな。」

「うわゝ、ちゃんと聞こえてるんだゝ。嬉しい。でも、なんかドキするなゝ。しかもきれいな声っていつてくれたゝ」

その声を聞いてナイトは思わず笑った。

なんて純粹でカワイイことをいう女なのだろう。

ナイトは、れいなを瞳を見つめた。

れいなも、ナイトの瞳をみつめた。

そのとき、彼は彼女の手を握っていた手を彼女の肩につつすと彼女の唇を奪った。

彼女は彼の意外な行動に驚きながらも嬉しそうにはにかんだ笑みを浮かべた。

第十八話「悲しい過去」

「悲しい過去」

ナイトとれいなはテレパシーの報告の為、ゴールドの部屋へ行った。ドアをノックするとゴールドが葉巻をくわえてめんどくさそうに出てきた。

「ああ、終わったの???ご苦労さん。さあ、上がって。」

ゴールドにうながされ、ナイトとれいなはゴールドの部屋に上がった。

ゴールドは早速テレパシーの結果を聞いてきた。

「で、どうなの???何か聞き出せた???」

「ああ。」

彼の話によるとどうやら彼女の家は父、母、れいなの3人暮らしだったらしいという。

しかし、父親が闇金融から莫大な借金をして蒸発。

母親はその見せしめとして彼らに殺されたのだという。

彼女の声が出ないのは、母親が殺されるのを目の前で見てしまったためのトラウマせいであっらしい。

ナイトは彼女から聞き出せたことを正確にすべて話した。

「そうなんだ」。ということは蒸発した父親が唯一の身寄りだったことか。何か、ホント穏やかじゃないね。で、父親の名前は?」

「すく駿だ。清鐘駿。」

「すぐるちゃんね、わかった。すぐるちゃんは僕が探しとくね。

見つかるまでは引き続き君の部屋におくしかないね。20日も空けたんだから今度はきちんとみるんだよ!」

ゴールドは葉巻を吸いながら言った。

「わかった。ではそういう方向でいこう。れいなもそれでいいな？」

ナイトは彼女の手に触れるとテレパシーで意見を求めた。彼女は笑顔でその手をとって言葉を伝えた。

「うん。またちよつとの間よろしくね、ナイト。名前呼んでくれてありがとう」

ナイトは自分にしか聞こえない彼女の声を聞くと、照れくさそうに彼女にむかって微笑んだあと、顔を戻してゴールドのほうに向き直った。

「了解だそうだ。父親が見つかり次第連絡をくれ。」

「はいはい。なるべく遅く連絡するよ。お別れは寂しいだろうからね。全く、何聞いたか知らないけどラブラブ過ぎて目も当てられないんだから。」

「では失礼する。」

「はいはい。否定しないのね。バイバイ。」

ナイトとれいなは一礼するとゴールドの部屋を後にした。ゴールドは彼らを見送った後搜索部隊に連絡を入れた。

「搜索コード0001、名前清鐘駿を直ちに搜索せよ。」

第十九話「さよなら、またいつか・・・」

「さよなら、またいつか・・・」

彼らの努力の成果なのだろうか。

ある日、ナイトがいつものようにテレパシーを始めようとれいなに近づいた。

彼女も彼の行動に気がついて、自ら近づいていった。

そのときに、彼女は足元にある机につまずいてしまった。

「きゃつ。」

彼女は転んでしまったが、ナイトは彼女の発した音を聞き逃さなかった。

「お前、今、声を出さなかったか??」

彼女もどうも実感があつたらしい。

恐る恐る口を開いてみる。

「ナ、ナイト。わ、私、声が出るよ!!しゃべれるよ!!」

その声を聞いたナイトは、声が出るようになった本人よりも嬉しそうに言った。

「よかったな!!これでテレパシーなんか必要なくなったな。これからは直接話せるな。」

「うん!!」

彼女が嬉しそうに答えたと同時にナイトの携帯が鳴った。

電話の主はゴールドだった。

「やあ、ナイト。すぐるちゃんの居場所らしきものが見つかったよ!!見つかり次第連絡入れるから。そんじゃまたね。」

あれから、何時間がたっただろうか。

一向に携帯が鳴る様子はない。

ナイトは小さくため息をついた。

それにつられてか、れいなもため息をついた。

二人とも、電話を待っている今の時間はとても複雑な気持ちだった。ナイトは、今まで8ヶ月も続いた「彼女のお守り」という任務から開放される喜びがある。

れいなは、長い間、離れ離れになっていた父親に8ヶ月ぶりに会える期待と嬉しさがある。

しかし、二人に共通するのが、悲しみである。

れいなが父親が見つかるということは、同時に、彼らの別れを意味するのだ。

二人の間に今まではなかった、気まずい沈黙が流れた。

この一秒が、一瞬が、二人で過ごす、最後の時間になるかもしれない。

そうわかつてはいるものの、別れにふさわしい、イカシた言葉が見つからないのが現状だ。

二人は黙って、静かに連絡を待った。

そのとき、ナイトの携帯のバイブが鳴った。

ナイトは少し躊躇しながらも携帯の受話器をとった。

「こちらナイト。用件を報告せよ。」

電話の相手はゴールドだった。

「ああ、僕だよ。すぐるちゃんの居場所がわかったんだ。褒めて、褒めて。今から部屋にすぐるちゃん連れてくから。ちゃんとれいなちゃんにさよなら言うんだよ。」

「ああ……。わかった……。」

ナイトは、どこか寂しそうに答えた。

電話を切つてすぐ、彼女の父親らしき人物がやってきた。

「れいな。迎えに来たよ。今まで一人にしてごめんな。」

「お父さん!!」

れいなは嬉しそうに、父親の元へ駆けていった。

父親も愛しそうに彼女を抱くと、ナイトへ向き直った。

「今までこの子の面倒を見てくださって、本当にありがとうございます。これから、私がきちんと面倒見ていきます。」

「そうか……。よかったな。」

彼はどこか冷たく返すと、父親にしがみついている彼女を見つめた。言いたいことは山ほどあるのに、言葉が出てこない。

そんな彼の様子を察してか、彼女が「サヨナラ」の言葉を発した。

「今までありがとう、ナイト。でも、これはバイバイじゃないよ。」

私は絶対また、ここに来るから。そして、ナイトのお嫁さんになるから!!」

彼女は元気よく宣言すると、彼に微笑みかけ、手を振った。

彼も、その笑顔を見て、微笑を返した。

しかし、やはり、「サヨナラ」の言葉を言うのは、あまりにつらすぎた。

彼は結局何も言えないまま、彼女の無邪気な笑顔をただ、見送っていた。

第二十話「栄光の覇者」

「栄光の覇者」

あれから9年の年月が過ぎた。

あんなに小さかったナイトも14歳になり、すっかり大人の顔になりつつあった。

昔から、整った顔立ちだっただけあって、成長した今は、女性の視線を欲しいがままにしている。

しかし、強さも、整った顔も、完璧なスタイルも、頭のよさも、女性の視線も手に入れたナイトの目標はただひとつ、最後に残った名声を手に入れることだった。

9年来、一度も王者の座を譲ったことのないゴールドに変わって、自分がこの騎士団を率いていくことを夢見ていたのだ。

彼は、ひそかにゴールドに勝つための特訓をしていた。

前にやったときは、ほぼボロ負け、いや、結果的には勝ったのだが、負けに限りなく近い勝ちだったので、今度は、ゴールドの動きなどを研究し尽くした。

その結果、ゴールドは、技の出、威力コンビネーションなどはとてもなく良いことがわかった。しかし、その一方で、非常に命中率が低いことがわかった。それでやたらと攻撃を出していたわけだ。数撃ちや当たる、ということわざもあるほどである。

これで彼の弱点がわかった。

ゴールドは絶対に普通よりも無駄に攻撃を打ってくる。

だから、攻撃をできるだけ避けて隙を作り、そこに強烈な一撃を加えればいい。

ナイトは、準備を万端にし、ゴールドに声をかけた。

「ゴールド、俺はお前に決闘を申し込む。俺と勝負しろ。」

ゴールドは意外に冷静な笑顔で、ナイトの求めに応じた。

「そっか」。もうそろそろ来るころだろうとは思ってたよ。わかった。やるうか。言っとくけど、僕は手加減が苦手なんだ。本気でいくからね。」

「臨むところだ。おい、ロッド。今回も審判お願いできるか?。」

「わかったよ。じゃあスタジアムで待つてるぞ。まったく・・・お前らは喧嘩が好きな奴らだな・・・。」

ロッドはため息混じりに返事をする、スタジアムに向かっていった。

彼らもロッドの後を追ってスタジアムに向かった。

ナイトとゴールドは互いの位置につき、武器を取った。

ロッドがあの時と同じように、右手を上げる。

「レディ??」

ロッドの声で、二人は姿勢を低くし、構えた。

「ゴー!!!」

その声と同時に、二人は地面を蹴った。

しかし、若干ゴールドのほうが早い。

このまま行けば、またしてもゴールドに先手を許してしまう。

だが、それは阻止された。

二人が地面を蹴った瞬間、ナイトから凄まじいほどの殺気が発せられたのだ。

戦いに慣れているゴールドでも、これだけ強い殺気は感じたことがなかったため、思わずひるんでしまった。

ナイトは思いがけないゴールドの動きに少々戸惑ったが、その隙を確実にについていった。

ナイトはゴールドの斧をいとも簡単に振り払うと、彼ののどに剣をつきつけた。

あっという間に勝負がついてしまった。

ロッドも負けたゴールドも意外な結果に驚いているようだった。

「俺の勝ちだな。団長の座はもらっぞ。」

ナイトはそういつて剣を鞘に収めると、さっさとスタジアムを後にした。

呆然と座ったまま動かないゴールドにロッドが話しかけた。

「おい、一体どうしたんだ！？お前があんな簡単に負けるわけないだろ？？」

その問いに、ゴールドが力なく答えた。

「いや、完全に僕の負けだよ……。あの殺気にはさすがに勝てなかったな……。僕よりアイツのほうが団長にふさわしいよ。」

ゴールドは立ち上がると、スタジアムを去っていった。

ロッドは彼の寂しそうな背中をしばらく見つめていたが、少し距離を開けて、彼の後についていった。

第二十一話「暗黒騎士団の謎」

「暗黒騎士団の謎」

「んで?? 今回のターゲットはこのよくわかんない狼たちの?? これくらいは退治できないとユニットの名声に関わるんじゃないの??」

ゴールドは葉巻を吹かしながら面倒くさそうに言った。

「まあ、そう言うなよ。現にこっちの仕事も少なくなってきたんだ。いい力モじゃないか。」

ロッドはゴールドに言っただけで聞かせるように語りかけた。

正直、最近コルディアの騎士団が力をつけているせいか、めつきりグローナルの騎士団の仕事がなくなってきた。来るものといったら、金にならないような小物か、リスク大の大仕事かだけである。

早い話、ロッドもゴールドもそんな仕事にうんざりしていたのである。

「そう。。。じゃあ、この仕事、受けるの?? 金になるようには見えないけど。んん!??」

そう言いつつ賞金のところに目をやった彼はその金額に唖然とした。

「10万ドル!?? こんなちっこい狼、退治するだけで!?? ありえないよー!」

「そう。それが今回の疑問点だ。」

そう言っただけでロッドは小さくため息をついた。

「普通の狼の群れなら、ユニットの騎士団なら、容易に退治するこ
とができるはずだ。つまり、今回のこいつらは普通じゃないってこ
とだ。」

ロッドはゴールドと目を合わせると続けた。

「大仕事になるぞ。」

「了解」 金になる仕事なら任せてよ!!」
彼らは「交渉成立」と言わんばかりに握手をすると、武器の準備をはじめた。

ユニツト郊外ウォンサツギ・・・

新鮮な魚介類が有名な、主に陽気な農民や漁師が住む村だ。

普段なら市場などをやっていて、活気に満ち溢れているはずである。しかし、村は静まりかえっていて閑散としている。

「なんか、さみしく村だね・・・。」

「仕方ないさ。皆、あの化け物におびえてるんだ。早いとこどうにかしないと・・・。」

「まあ、とりあえず村長に話を聞いてみようか。それでいいかな? 団長さん。」

ゴールドは皮肉混じりにナイトに承認を求めた。

「・・・・・・。」

ナイトは無言で首を縦に振った。

「あゝあ、君って奴は。またそれだよ。君には口がないの???」
「・・・・・・。」

「無視かよ。ホント、好きだよね。」

そういうとゴールドはナイトの肩に手を回した。

しかし、その目は笑っていない。

ナイトはゴールドをにらみつけた。

ゴールドも負けじとナイトをにらみつけた。

二人の間に重い空気が流れた。

まずい。このまま行くと二人の暴動が起きかねない。

それを察したロッドがその雰囲気を通ち切った。

「まあまあ。とりあえず行き先が決まったんだからいいだろ?? 仲間同士でやりあうなんてゴメンだからな。さあ、行くぞ。」

「はいはい。パパの言うことは聞かないとね。」

「俺はお前みたいなのはヘンタイを子供に持った覚えはない。」

「ヘンタイ！？ヘンタイって・・・」

「ほら、早く行くぞ。」

「・・・・・・・・・・」

「で、探したはいいいけど・・・」

ゴールドは疲れきった表情で呟いた。

「どれが村長の家か分かんないじゃんかよー！！」

ゴールドが叫びたくなるのも無理はない。

家の形や色、素材がすべて全く同じである。

辛抱強い彼らも、さすがに途方に暮れてきた。

「あなたたちはもしま・・・、暗黒騎士団の者たちか？？」

そのとき、後ろから聞こえた声に一同がいつせいに振り返った。

そこには背の低い頭に白髪が混じった老人が立っていた。

「あなたが村長さん？？」

ゴールドの問いに彼は首を縦に振って答えた。

彼こそが探していた村長なのだ。

しかし、ロッドは喜びと同時に彼の先ほどの発言に疑問を持った。

「暗黒騎士団？？それはどういうことですか？？」

「ああ・・・。実は君たちにはいい噂がなくてね。任務のためなら犯罪にでも手を染めると聞いている。せつかく来てくれたのに、すまないな。」

「いえ、もう言われなれているので。それより、この魔物についてお話を聞かせていただませんか？？」

「わかった。期待しているぞ。」

どうやら化け物は夜行性らしい。

村長からの話を聞いて、彼らも本格的に準備に入った。

第二十二話「孤児の騎士」

「孤児の騎士」

騎士団一行は、夜、民家の後ろに身を隠し、ターゲットを待った。不可解な狼たちの行動を確認するためだ。狼は普通肉食である。

だから彼らが人里に降りてくる理由として考えられるのは、食料となる草食動物が不足しているからであろうということくらいである。しかし、彼らは人を襲いに来るのだが、人を食べようとしていた形跡がない。

つまり、何か別の目的で彼らは村を襲いに来ているということである。

何があるにしろ、このまま彼らを放っておくのは危険である。

彼らが行動を始め次第、騎士たちは奇襲をかけようと思っていた。

しかし、そのときはナイトの声とともに、足早に訪れた。

「ターゲット確認。前後左右に円形に配置。」

「ちつ。くそつ。囲まれたか・・・。」

ロッドは自分の不注意を疎み、悔しそうに舌打ちをした。

「なになに??こんなたくさんいたんだ。いつの間に??」

ゴールドは雰囲気合わないのんきな言葉でつぶやいた。

四方八方の狂気に満ちた赤い目が、騎士たちをにらみつけている。

騎士たちは思わず目を見開いた。

しかし、その中で一人だけ冷静さを失わないものがいた。

団長であるナイトだ。

ナイトは剣を抜くと、全員に冷たい声で命令を下した。

「攻撃用意。戦闘開始。」

その声で目が覚めたのか、騎士たちは剣を抜き、一斉に狼の群れに

つつこんでいった。

しかし、彼らの目の前で信じられないことが起こった。

剣を持っている彼らの手が、重い岩でも乗せられているかのように急にとてつもなく重くなつたのだ。

彼らはその重さに耐えられず、思わず剣を取り落としてしまった。

「ど、どうなってるんだ！？こんなの聞いてないぞ！！」

ロッドがはき捨てるように聞いた質問に、ゴールドが答えた。

「あいつら、魔法を使ってる……。グラウンド・マジックだ！！」

「ばかな！！あんな動物にそんな難解な大技使えるわけがない！！」

ロッドは大声で否定しながら、ゴールドが頭がおかしくなつたのかと本気で心配した。

そうでなければそんなありえないことを言うはずがない。

しかし、ゴールドはいたって冷静だった。

「いや、今のは間違いなくグラウンド・マジックだよ。重力を、ある一定の部分だけ通常の数倍にしたんだ。そうすれば、みんな重くて剣なんて持つてられないからね。僕もよく使う手だから、間違いない。」

ロッドだけではない。ナイト意外の全員が、その言葉に啞然とした。そんな奇妙な技を使ってくる軍団に、この人数ではとても勝てるはずがないからだ。

ロッドは相手の攻撃をかわしながらゴールドに言った。

「ここは一旦体制を立て直そう！！この数はとても相手にできない。このままでは全滅してしまふ。」

すると、ゴールドは残念そうに言った。

「それは無理だね。この円陣に下手に突っ込んでいっただらそれこそ全滅だ。」

「じゃあどうするんだよ！？」

そのロッドの言葉が終わるか終わらないかくらいに、突然、5匹ほど狼が倒れた。

「簡単だ。ぶつた切ればいい。」

ロツドの問いに、闇の中から、重苦しい声が答えた。

「あんたは・・・。」

ロツドは、見覚えのある顔に心底驚いているようだった。

「よく、ロツドか。俺の管轄で何遊んでんだ??こいつらは俺たちの獲物のはずだ。邪魔すんな。」

「ロドリゴ!!お前も来てたのか。ちょうどよかった、こいつらは・
・・」

「どけつつてんだよ!!邪魔だ、ザコ共が!!」

そう言つてロツドの言葉をさえぎると、ロツドを突き飛ばし、ロドリゴたちは敵陣に突っ込んでいった。

しかし、やはり彼らも狼たちの魔法には、太刀打ちできない様子だった。

すると、ナイトが一言つぶやいた。

「加勢、開始。」

第二十三話「暗闇の戦い」

「暗闇の戦い」

そのナイトの声と同時に、騎士たちが目を覚ましたかのように狼たちの群れの中にもう一度突っ込んでいった。

しかし、騎士たちは、今度は一人一人各々で戦う気はさらさら無いようだ。

剣術に長けたものが前に出て、魔術に長けたものが後ろで魔術を放つ絶好のときを待つ。

つまり、前衛組みは言わば「おとり」で、魔術師たちが「本体」になる、前衛・後衛型の戦い方に変更したのだ。

しかし、ロドリゴはナイトのその判断に納得いかず、ナイトの胸ぐらをつかんで、大声でナイトに怒鳴りつけた。

「なぜ俺たちの邪魔をする?? お前らは引っ込んでろ!!」

するとナイトはその手を静かに払うと、冷たい声で言い放った。

「邪魔ではなく、加勢だ。現にあなたたちの今の實力ではこの狼たちに勝てる確率は0.000001%だ。この数値はほぼ0に等しい。つまり、我々の加勢なしであなたたちが彼らに勝つことはできない。」

ナイトの言葉に、ロドリゴは余計に腹が立つたらしく、

「うるせえ!! てめえなんかに助けてくれなんて頼んだ覚えはねえ!! 勝率は...0.00001だかなんだか知らないが、あることにはあるんだ!! こいつら下からせる!!」

「その要請は承認できない。また、勝率は0.000001%だ。」

ロドリゴの言葉にナイトは丁寧言い返した。

「知るかそんな数字!! もし下がらせないんだったらお前ら...」
ロドリゴがナイトにインネンをつけようとしたとき、急にナイトが

すばやく剣を抜き、ロドリゴに切りかかった。

なんとかギリギリのところかわしたものの、もし当たれば大怪我どころではすまない。

「あつぶねえな！！バカヤロー！！てめえやるならフェアにやれよ！！」

ロドリゴの言葉を無視すると、ナイトはロドリゴに背を向けて、狼たちの群れのほうへ歩いていってしまった。

彼を追いかけようとしたロドリゴの背後でドサツという妙な音が聞こえた。

振り返ってみると、狼が5、6体、ばつさり真つ二つに切られて倒れていた。

狼たちに囲まれたゴールドたちだったが、ロドリゴ一行の加勢により、優勢を保っていた。

お互いに助け、助けられの二人三脚で狼たちを倒し、あと一息というところまで狼たちを追い詰めた。

また、ゴールドには得策があるらしく、そこまで狼たちを追い詰めたにも関わらず、一旦距離を置いて、あえて彼らに攻撃するチャンスを与えた。

案の定、狼たちはゴールドに向かってグラウンド・マジックで作った、空気の針を放ってきた。

するとゴールドは、待ってましたと言わんばかりに、グラウンド・マジックをお返ししてやった。

ゴールドは空気の濃度を調節して、厚く、弾力性のある空気の壁を作り、空気の針を彼らに向かって跳ね返して、彼らを一掃した。

騎士たちはロドリゴの意向とは裏腹に、グローナルとユニットで協力して、狼たちを殲滅した。

最後の一匹が倒れたとき、ナイトが一声かけた。

「ターゲット、デリート完了。戦闘終了。」

その声を聞いて、騎士たちからは歓声が上がったが、ひとりだけ今

の戦いに納得がいけないものがいた。

ユニットの騎士団の団長ロドリゴだ。

ロドリゴはロッドとナイトの前に立つと、先ほどもっと大きな声で抗議をした。

「なぜ、なぜ俺が止めても邪魔をした??俺たちで十分だとあれほど言っただろ??」

「何度も同じことを繰り返すのは好きではない。あのままだとあなたたちが全滅する恐れがあったからだ。」

ナイトの冷たい返事にロドリゴは逆上して怒鳴りつけた。

「えらそうなこと言うな!!さっきの戦いだって貴様らは俺たちの足手まといっただろうが!!」

「むしろ足手まといはあなたたちだったように感じるが・・・??」
「てめえ・・・!!」

ロドリゴが剣を抜いて、ナイトに切りかかりうとしたところで、慌ててロッドが止めに入った。

「まあまあ、でも結果的に助かったんだからそれでいいじゃないか。ここで争ってもどちらの得にもならないだろ??それよりも早く長老に報告しにいく。」

「ちっ・・・。」

ロドリゴは舌打ちをしたが、しぶしぶロッドの言葉に従った。

ナイトも、彼の様子を見て、剣を納めると騎士たちの群れについていった。

第二十四話「血縁関係」

「血縁関係」

「そうか。あの狼たちを撃破したか。それはご苦労だったな。」

村長は騎士たち一人一人にお茶をだし、静かに言った。

「そうだよ。僕たち強いでしょ？寝て寝て」

「しかし、これができたのは俺たちだけの力じゃないんです。ロドリゴたちが協力してくれたから・・・。」

ゴールドの傲慢な態度に逆上して、またロドリゴが怒り出す前に、ロッドがロドリゴを見ながら、すかさず口を挟んだ。

するとロドリゴは不服そうに村長に言い訳した。

「違う！！こいつらが勝手に俺たちの獲物に手を出してたんだ！！こいつらは俺の管轄の場を荒らし回ってたんだよ！！」

「ロドリゴ」

村長は興奮するロドリゴを落ち着かせようと、優しく語りかけた。

「別にわしは彼らにも、お前にも怒ってはいない。むしろ感謝しているのだ。よく、彼らと協力して戦闘ができたな。偉かったぞ。」

「俺は協力した覚えはねえな。危うくあのクソガキに」といつてナイトを指差し、続けた。

「殺されかけたんだ。とても協力してるって感じじゃなかったな。」

村長の言葉に内心嬉しい気持ちでいっぱいだったロドリゴだが、ここで手放して喜んで騎士の名がすたる。

ロドリゴは、嬉しい思いを隠して、わざとひねくれたセリフを返した。

「なに、どっちにしろお互いに助かったのは事実だ。彼らには礼を言わんとな。」

そいつって村長は、グローナルの騎士たちに頭を下げた。

するとナイトは待ちくたびれたのか、用件を切り出した。

「ところで、村長。報酬はまだか??」

「おお、そうだな。これが約束の10万ドルだ。」

そいつって村長は大きなトランクの中から札束を取り出し、ナイトに渡した。

それをみたロドリゴは、どうも納得いかない様子で噛み付いてきた。

「ちよつと待てよ。何でてめえが全額もらってんだよ??」

「そういう契約だからだ。」

ナイトはさも当然のようにさらつと答えた。

「そんなのありかよ!? 俺たちだって戦っただろうが!!」

「勝手にお前たちが加わってきたただけだ。」

「ふざけんな!!」

このままではまた喧嘩だ。

しかし、村長はそのことで提案があるらしく、片手を挙げて、ロドリゴを黙らせた。

「ロドリゴ。誰がお前たちに報酬をやらんと言ったんだ?? お前たちのぶんもちゃんと用意してある。祖父というのは、孫には何でもやりたいものだ。」

しかし、ロドリゴはその言葉に戸惑いがあるようで、ナイトに話す時とは別人のような小さい声で言った。

「で、でもよお……。恩人から金を取るって言うのは何か……。ちよつと違うような気がするんだが……。」

村長は、そのロドリゴの心中を察していたのか、優しく、包み込むような声で言った。

「だがお前たちも戦ったのだ。報酬をもらう権利がある。これは決して巻き上げるのとは違う。仕事をしただけの「報酬」だ。そうだから??」

黙って動こうとしないロドリゴに、村長はなかば強引に札束を渡した。

「これはお前へのプレゼントだと思って受け取れ。」

しかし、彼が本当に気になっていたのは、そのことではなかった。
「これはありがたくもらおう。でも、でも、俺は本当にあんたを「
じいさん」って呼んでもいいのか???だって、俺はあんたのホント
の孫じゃ・・・」

ロドリゴは、小さいときに戦争で、グローナルの騎士に両親を殺さ
れた孤児だった。

身寄りのないロドリゴを孤児院から救い出し、わが子のように育て
てくれた村長には、感謝しても、し尽くせないほどの恩というもの
がある。

しかし、それでも「じいさん」と呼ぶのには、やはり、少なからず
抵抗があった。

しかし、村長はロドリゴのその思いを断ち切るように、情けない言
葉を聞かないように、ロドリゴの言葉を途中で切って、元気よく宣
言した。

「わしと血がつながってようがなかるうが、今更それは関係のない
ことだ。別にお前がそうなりたくて、なったわけじゃないのだから、
引きめを感じることは全く無い。わしのことは、本当の祖父だと思
っていい。」

村長はそついうと、自分よりも遥かに背の高い、ロドリゴの頭をな
でた。

ロドリゴは、今まで感じたことの無かった愛を感じ、にっこりと笑
った。

グローナルの騎士たちは、その暖かい笑顔に見送られながら、ウォ
ンサッギを後にした。

第二十五話「思惑」

「思惑」

研究者の町ジスニア・・・

ここでは有能な研究者たちが、日夜研究に精を入れる場所である。この騎士団に、グローバルに居る国王から一通の手紙が届いた。その手紙には、ジスニアの騎士団に対する批判がびつしりと書き込まれていた。

その手紙から見て取れるように、国王は相当腹を立てているようだった。

その手紙を読んだ、この騎士団の団長と思しき人物がぼつりとため息混じりにつぶやいた。

「国王陛下……。言いたい放題ですね。我々を役立たずと言い切りますか。」

「ウイレム様……。私は、そのような言葉はお気になさらなくてもよろしいかと思います。ウイレム様は十分頑張っておられますよ。」

一人の部下がウイレムを慰めようと言葉をかけたが、余計逆上させてしまったようだ。

「それでも国王陛下の役に立っていないければ、何もしていないのと同じですよ。それもこれも、あのゴールド・スターが私の場所を奪ったせいです。あとあの榊騎士とかいう悪魔が国王を洗脳しているせいだ。許せませんね。でも……」

そういつてウイレムはまた、深いため息をついた。

「結局、彼らのほうが仕事ができているということですかね。これだけ離れていれば、あちらの様子を知ることさえも困難ですからそれにしても困りましたね……。」

ウィレムはぶつぶつ言いながら練兵場をうろろ歩き出した。

「何にお困りなのですか??」

部下がすかさず質問する。

その質問にウィレムが静かに答えた。

「このままではあのゴールド・スターや神騎士に国王の信用までもとられてしまいます。こうなったら奥の手ですね。」

そういうとウィレムは静かに笑った。

「とっておきのスパイを用意しましょう。とっておきのね。危険の目は早めに摘んでおくべきなのです。」

そういつてウィレムは一人の女性を呼んだ。

三日後・・・

グローナルの騎士団のロッドのもとに一通の手紙が届いた。

珍しくジスニアの騎士団からである。

ロッドは不審に思いながらもその封を開けた。

その手紙の内容は、一人の研修生を送るから面倒をみてくれ、というものであった。

ジスニアからの手紙にしては、えらく普通の内容である。

ロッドはますます首をかしげた。

するとその様子をみたゴールドが、風のような速さでやってきた。

「何々??何見てんの??ラブレター??モテモテじゃん!!僕にも見せてよ」

「違う!!勝手に妄想するな、変態。ジスニアの騎士団から使者を送るって書いてあるんだ。でもどうも怪しいな。何かあるんじゃないかって思うんだが・・・。」

ロッドはゴールドに丁寧なつつこみを入れた後、勘のいい彼に聞いた。

ゴールドはその内容を聞いて少し考え込むような仕草をみせたが、すぐに答えた。

「君はホントに心配性だね。きっとその心配は杞憂になると思うよ。」

あのヘンタイだってたまにはまともなこと考えるってことさ。それより、いつ来るの??その使者って。」

「一カ月後だけど・・・。」

「そんじゃ、たまってる仕事片付いたら準備しなきゃね。」

「ああ・・・。」

ロッドは、珍しくあつさりとジスニアを信用したゴードルの態度に疑問を感じながらも、そのときは彼に合わせた。

第二十六話「悲しき死神」

「悲しき死神」

ユニット郊外ウォンサツギ・・・

この街には狼退治に來たことがまだ記憶に新しい。

以前來たときとは違ってかわって、街中が活気付いて、穏やかな午後に戻りつつあった。

しかし、以前來たときと変わったのはそれだけではない。

「暗黒騎士団」と呼ばれていたグローナルの騎士たちは「英雄」と祭り上げられるようになったのだ。

今日も彼らが訪れると、街の住人は目を輝かせて大歓迎してくれた。
「おう！あんたたちか。見るよ！！この復興ぶり！！見ちがえた
だろ？？これもあんたたちのおかげだぜ。」

騎士たちが通るたびに歓声が起きるほど、この街では彼らは特別な存在だった。

それは街の住人だけではない。

この街の村長も同じだった。

ちようど街なかで彼らが村長と遭遇したとき、村長は嬉しそうに話しかけてきた。

「お前たち、来ていたのか。報告でもしてくれば存分にもてなしてやったというのに・・・でも、お前たちの出番は今のところなさそうだぞ？？見てみる！！あの日以来あの狼たちは來ないし、そのほかの目立った事件もない。平和そのものだ。ところで今日は何の用だ？？視察か何かか??」

しかし騎士たちは、村長の表情とは似ても似つかない表情で黙ったままうつむくばかりで何も話そうとしない。

「ここにいる住民に殲滅令が出たからだ。」

彼らの気持ちを察してか、ただ単にKYなのかは謎だが、何も話そうとしない彼らにかわってナイトが冷たく言い放った。

その言葉に、村長を含めた街の住人は耳を疑った。

「そ、そんな、馬鹿な……。わしらが国に何をしたというのだ！　！わしらはただ……。ただ、自分の生活を営んでいただけだ！　！」
彼の言葉の意味をわかっているのかわからないが、それでもナイトは冷たく続けた。

「あなたたちの事情がどうであれ、これは国の命令だ。我々が逆らうことはできない。あなたたちもだ。命令が下された以上、我々はその命令に従うだけだ。」

彼のその言葉はグローナルの騎士たちに向けられているようでもあった。

そついい終わるとナイトはゆっくりと剣を抜いた。

その仕草をみた村長は慌てて抗議した。

「ちよつと待て、ナイト。いくら命令と言っても従うべきものとそうでないものがあるだろう？　？この場合はお前にとってはどのようなのだ？　？」

「従わざるべき命令など、この世に存在しない。」

彼はさも当然のように言った。

彼の言葉を聞いて、村長は彼らの行動を悟った。

村長は住人のほうを向くと大声で叫んだ。

「皆のもの！！逃げるのだ！！生き延びるのだ！！」

「無駄なことを。」

ナイトはそつつぶやくと、すばやい動きで逃げ惑う住民を次々と切り捨てていった。

ナイトの行動を見て、それまでうつむいていた騎士たちも、不本意ながら殲滅を開始し始めた。

女子供関係なしに騎士たちの剣は次々と住人たちの体を引き裂いていった。

村長はナイトの剣を受け止め、応戦しようとしたが、彼の剣圧で吹

き飛ばされた。

倒れた村長ののど下にナイトは剣を突きつけた。

「覚悟しろ。」

彼の冷たい言葉に自分自身の命の終わりを感じた村長はゆっくり目を閉じると、ナイトに最高の恨みを込めて、一言つぶやいた。

「やつぱりお前たちは暗黒騎士団だな。」

彼の遺言を聞いた後、ナイトは勢いよく剣を振り下ろした。

「任務、完了。」

西に傾ききった太陽が、ウォンサツギの街を赤く染めていた。

第二十七話「強者どものマーチ」

「強者どものマーチ」

ウォンサツギの殲滅令から2週間の月日が経過した。

まだ2週間、というものもいるが、彼らにウォンサツギの悲劇を嘆いている時間はない。

次はジスニア郊外の小さな町、カールスルーエの視察にいかねばならないのだ。

しかし、今回はまだ視察なので、ゆっくりできるといえばできるのである。

そう思つてか、ゴールドが意気揚々と叫んだ。

「前回の任務は最悪だったけど今回は楽だね！きつとすぐ終わるよ。そしたら、本格的に新人さん迎える準備しなきゃね、ロッド

」

彼のノーテンキな発言とは裏腹に、ロッドは気難しい表情で答えた。
「しかし、カールスルーエではここ最近、悪魔族が団体で街を徘徊しているというよくない噂を聞いている。しかも彼らの戦闘の技術はそうとうなものらしい。きつとB種なんだろうな。気を抜くと一撃でやられちゃうぞ。」

「ダイジョーブ、ダイジョーブ いざとなったらこの僕が愛しのロッド姫のために一肌ぬいであげるから」

「……………いらない。」

ゴールドの熱烈な愛の告白を受け、ロッドは鳥肌が立つのを感じた。
「姫」づけである。

この上なくキモイ。

ゴールドをさけるように、ロッドは準備室へと逃げ込んだ。

2日後・・・

グローナルの騎士団の姿はジスニア郊外の町カールスルーエにあった。

農村地帯が当たり一面に広がるのどかな町だ。

のどかな視察日和の町をみてゴールドは憂鬱そうにつぶやいた。

「何これ。どこ見渡しても田畑ばかりじゃん！！ショッピングは？
？ナンパは？？」

「お前そんなもののために、自分の任務じゃないのにこの視察についてきたのか・・・。」

ロッドは呆れ顔でゴールドをみた。

「当たり前じゃん！！そうじゃなかったらこんなクソつまらない視察に誰がついてくるんだよ！！もー最悪。」

ゴールドは口をとがらせてスタスタと早足で歩き出した。

他の騎士たちもそのあとを追うように早足で歩いた。

すると突然ゴールドが足を止めたため、ロッドはゴールドの背中に顔をぶつけた。

「いつてえな！！急に止まるなよ！！！」

「あれ・・・なんだ・・・??」

「はあ！？そんなこといつて誤魔化すなよ。今のは絶対・・・」

それまで怒りに任せてゴールドに怒鳴っていたロッドだったが、彼の見ている方向をみて、その感情は一気に冷めていった。

「何だ、あれ・・・??？火事か??？」

「いや、違う。何かが、違う。」

ゴールドの言葉が終わるかおわらないくらいにナイトの冷たい声が響いた。

「殺気確認。攻撃抑制機能、一時解除。抹殺、開始。」

ナイトがそういった瞬間、突然、黒い影があたりをつつみ、彼らに襲いかかった。

何とか間一髪のところかわしたものの、たった一発の攻撃で、地面が地割れを起こしている。

これをまともにくらったら、生きて帰れる保障はない。

「魔術師！？それとも悪魔族！？どっちにしろこのままじゃやられちゃうよー！」

「冗談じゃない。お前俺を守るんじゃないのか??」

「そんなこといつてる場合じゃないよー！」

ゴールドは彼らの危険さをその殺気から十分すぎるほど感じ取っていた。

彼らは強い。

もしかしたら全滅する恐れだつてある。

どうにかして逃げなければ。

するとそのとき、ナイトがつぶやいた。

「俺にまかせろ。お前たちは隙について逃げる。いいな??」

「でも・・・」

何か言おうとしたゴールドを無視し、ナイトは敵陣へ突っ込んでいった。

「あいつに従おう。このままではどのみち全員死ぬ。」

ロツドの言葉に、ゴールドは静かにうなづいた。

本当にひとりで大丈夫なのかという騎士たちの心配を裏切るように、ナイトは次々に敵を切り伏せていく。

あっという間に二、三人まで追い詰めた。

そこまで追い詰められた彼らが、今までかぶっていたローブを脱ぎ捨てた。

目が赤色をしている。

「やはり悪魔族か。」

ナイトは小さくつぶやいた。

「さすが我らが同胞。すさまじき強さだな。だが、なぜ我ら同胞を攻撃する??我らは仲間ではないか。なぜ人間に加担している??」

「命令だからだ。国王の命令は絶対だ。」

彼らの問いに、ナイトは短く答えた。

冷たいが、強い意志のこもった他の意見を一切受け付けないといった返事に、彼らはがっかりだ、といった様子でつぶやいた。

「そうか。それは残念だ。お前だけでも助けてやろうと思ったのに。」

「その必要は無い。今から死ぬのはお前たちなのだから。」

そういつてナイトは彼らに切りかかった。

「愚かな。」

彼らは突っ込んできたナイトに向かって手をかざした。

だが、何かをしようとする前に、切られて息絶えた。

「あと二人。」

ナイトはそういつてボスらしき人物に剣先をむけた。

第二十八話「墮天使」

「墮天使」

ナイトは大きく息をすって、彼らに突っ込んでいった。

彼らは二手に分かれて、ナイトの意識を拡散させようとしたが、ナイトは最初から狙っていた手下を切り伏せた。

ボスはきつと強いはず。

手下を先に倒してから戦ったほうが、手助けをするやつがいない分、いくらか戦いやすくなる。

最初からそれを狙ったの行動だった。

ボスはさすがに味方を全員やられて怒り狂っているのかと思いきや、意外にも冷静にその様子を眺めていた。

「本当にお前はめちゃくちゃだな。」

ボスのそんな言葉を無視し、ナイトはボスに切りかかった。

しかし、彼はガードする様子も、攻撃を避けようとする様子も無い。ただ、笑ってナイトの行動を見つめているだけだった。

彼の意外な行動に少々驚いたものの、ナイトは的確に彼の肩を切りつけた。

すると、とんでもないことが起こった。

なんと、攻撃を受けたボスではなく、攻撃をしたナイトが肩に傷を負うことになった。

ナイトは肩をおさえて一旦ボスと距離をとった。

その結果に心底驚いて、混乱しているようだった。

しかし、ナイトが大怪我を負っている絶好のチャンスだというのに、ボスは攻撃してくる様子が無い。

ただ笑ってナイトを見つめるばかりだった。

その様子をみて、ゴールドがナイトに叫んだ。

「ナイト！！そいつ、ボディ・スリップっていう魔法を使ってる！
！攻撃を受ける対象が変わる魔法だ！！」

それを聞いて、ナイトは冷静さを取り戻したようだった。
対処法はイマイチわからないが、攻撃を受ける対象が変わる魔法なら、こちらから攻撃を仕掛けなければいいだけのことだ。

どうやら自分の置かれている状況がわかったらしいナイトに、おもしろくない、といった様子でボスがようやく剣を抜いた。

「どうやら俺も本気を出さなきゃいけないみたいだな。同胞といつても、人間に加担している裏切り者に手加減はしないぞ。覚悟しろよ。」

そういつてボスは目にも留まらぬ猛スピードでナイトに突っ込んで、凄まじい速さでコンボを繰り出した。

その速さに、さすがのナイトもギリギリのところではけるのがやっとだった。

深い傷のせいか、いつになく息まで切らしている。

この様子だと、あまり長い時間の戦いには耐えられないだろう。

その様子を見たボスにはやりと笑ったあと、もう一度ナイトに突きを繰り出し、ナイトがそれをかわした隙について、彼の腹に一発協力的なボディブローを浴びせた。

ナイトは傷の痛みと殴られた痛みに耐えかねてその場にしゃがみこんだ。

ボスとはどめをさすため、剣を大きく振り上げた。

反撃しようにも、痛みで体がいうことをきかない。

ナイトは覚悟を決めた。

ボスの剣が振り下ろされた瞬間、ナイトの剣がボスののどを突いた。
激しい戦いのまくがこれで降りたかのように思えた。

皆は安心して、仰向けに倒れているナイトのもとに向かった。

しかし、彼らを待ち受けていたのは衝撃的な映像だった。

今まで、絶対的な強さをほこったグローナル騎士団の団長が、右目から大量の血を流して倒れている。

「ナイト！！ナイト、ナイト！！」

騎士たちは激しく動揺し、何度も彼の名を呼んだ。

しかし、彼は指先を動かすのがやっとらしく、動かない手をムリやり動かして「生存」を伝えた。

この状態では、治療を急ぐ必要があるようだ。

彼らは急いで応急処置をし、グローナル城へ引き返した。

処置室から出てきたドクターにゴールド、ロッドの二人が駆けよった。

「どうなんだ？？ナイトの具合は？？」

「はい。何とか一命は取り留めましたよ。今は個室で休ませております。皆様の的確な応急処置のおかげですね。しかし・・・」
そういうとドクターは表情を曇らせた。

「ナイトさんの右目の損傷は予想以上に激しくてですね・・・治療のしようがありませんでした・・・」

「どうということ？？まさか・・・」

ゴールドは自分の予想が外れるようにと願った。

しかし、その予想はみごとに的中してしまった。

「・・・ナイトさんの右目は摘出させていただきました。彼の右目はもうありません・・・。つまり・・・」

「もう見えないということか・・・」

言いづらそうなドクターに代わって、ロッドがドクターの言葉を代弁した。

「そんな！！それじゃあナイトの復帰はどうなるの？？」

ドクターはうつむいて、小さく低い声で答えた。

「難しいでしょうね・・・」

三人の間に気まずい沈黙が流れた。

「・・・申し訳ありません。私が力不足だったばかりに・・・」

「ドクターのせいじゃない。それに、まだ復帰できないと決まったわけじゃない。」

「でも絶望的だよ・・・。」

彼らは、騎士団とナイトの未来を考えると、とても希望をもてなくなってしまった。

そのころ研究者の町ジスニアでは一人の女性がジスニアを後にして、東へ向かっていった。

第二十九話「10年の時を超え・・・」

「10年の時を超え・・・」

「」

ナイトはぼやけた意識の中で、左目には真っ白な天井を、右目には真っ黒な天井を見た。

だが、いくら目を動かしても左目には真っ白な、右目には真っ黒な風景しか見えない。

まだ自分は夢の中にいるのかと疑ってしまつほど、単調な風景しか見えない。

しかし、麻酔の切れた右目の痛みで今、自分の意識ははつきりしているということがわかる。

なぜ、物体が物体が見えないのだろうか？

そして、なぜ左右で違う風景が見えるのだろうか？

自分はどこにいるのだろうか？

どのくらいの時間この単調な風景を見続けるのだろうか？

さまざまな疑問が一気に彼の脳を埋め尽くした。

だが考えたところでわかるはずもない。

ナイトはとりあえず自分の寝ているベットと思われるものから体を起こすと、あたりを手当たり次第触つてみた。

だが触つたところでそれが何であるかなどわかるはずがない。

彼は短くため息をついた。

そのとき、やや右側から甲高い声が聞こえた。

「あ、目覚めたんだ！！よかった！！」

彼は瞬時に声のした方へ向き、戦闘態勢をとつた。

「何者だ??」

彼の冷静な声に彼女は短く笑って答えた。

「あははっ。そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。私は清鐘麗那。あなたのメイドとしてジスニアから派遣されてきたの。実はあなたとはすごく昔に一度会ってるんだけどね。あ、でもあなたは活躍したからそんなこといちいち覚えてられないか。」

清鐘麗那・・・。

どこかで聞いたことのあるような名である。

いや、むしろ忘れるはずの無い名である。

10年前のジスニアの街で、声が出ないせいでマフィアにからまれているところを救い、ともに共通の楽しい日々をすごした彼女の名である。

彼は表情を変えずにその声の主を見た。

しかし、真っ白な風景と真っ黒な風景以外何も見えない・・・。

「ここはどこだ??」

彼は清鐘麗那と名乗るその女性に冷たくたずねた。

「ああ、そっか・・・。包帯で見えないんだね。ここはあなたの部屋だよ。今あなたが寝てたのがあなたのベット。あなたはジスニア郊外の町カールスルーエの悪魔族と戦って右目を負傷したのよ。」

彼女の最後の言葉が、彼の胸にひっかった。

「右目を負傷。それは、つまり右目がないということか??」

彼は表情も口調も変えずに聞いたが、内心そうでないことを祈った。だが、彼女からの返答は残酷なものだった。

「そうか。ということは、もう騎士への復帰は絶望的であるということだな。」

彼は冷たくつぶやいた。

彼女は彼の弱気なその発言が気に入らなかったのか、急に表情を変えて喋りだした。

「何言ってるの!? あんたはこれからその騎士団に戻る為にリハビリするんでしょうが!! あんたがそんな弱気なことってたらあたしがあんたを支援する意味ないでしょうが!!」

感情的な彼女とは対照的に彼は近くにあったベッドに座ると冷静に

言った。

「では聞くがお前が入団者審査員だったとして、片目のない者を採用するか？俺だったら絶対に採用しない。足手まといになるだけだからな。俺が努力したところで騎士団に戻る保障はどこにもない。」

彼の発言にとうとう彼女はキレてしまった。

「あんたねえ・・・、やってみもしないで勝手に決めつけないでよ！！」

彼女は息継ぎをして続けた。

「あんたは今まで数々の伝説を残してきた男でしょう！？その体では「無理」だと言われたのに大人でも扱いの難しいロングソードを5歳で使いこなし、絶対に「無理」だと馬鹿にされながらも5歳で入団試験に受かって大人たちのどきまをぬいて、「無謀」だといわれながらも14歳で団長の座をゴールドから奪いとった最強の騎士じゃない！！そんなやつがこんなところで足踏みしてていいの！？あなたはこれからいくらでも大きくなれる可能性があるのに、こんなことでその可能性を捨てていいの！？百戦錬磨の騎士が怪我なんかに「負けて」いいの！？」

彼女の言葉をナイトは黙って聞いていたが、不意にベッドから立ち上がると静かに彼女につぶやいた。

「そこまで言われてはやりえないわけにはいかないな。俺もやるだけやってみよう。」

彼女の情熱が、彼の氷のような心を溶かしつつあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699e/>

COMPASS

2011年1月25日17時11分発行